

# Marie de FRANCE の *Lais* における愛の諸相

本 田 忠 雄

## はじめに

古代ギリシャにおける愛は積極的に肯定されるものではなかったらしい。それは人生を狂わせるものとして恐れられていたようだ。古代ローマにおいても事情は本質的に同じであったと言われる<sup>1)</sup>。フランス文学史を紐解いてみても、11世紀の聖者伝や武勲詩は男女の愛を前面に押し出すものではなく、そこに登場する女性も男性に比し生気に乏しい。しかしある歴史家が「愛は12世紀の発明である」と述べたごとく12世紀の南仏で変化が起こる。女性を高貴な存在として崇め、熱烈な愛を捧げることにより自己を向上させる。このような新しい愛の観念が *troubadour* たちにより歌い上げられた「至純の愛」(fin'amor) である。北仏の「宮廷風恋愛」は「至純の愛」を受け継ぐものであるが、「後者に見られる官能性がかなり切り捨てられる反面、思弁的になり、教条化され、恋の手続きについてもいっそう複雑でやかましいものになった。貴婦人は今や専制君主に近い力をもち、誇り高い騎士と言えども、愛する貴婦人の命令には絶対服従しなければならない<sup>2)</sup>」というのは新倉俊一氏の見解である。12世紀末に *Lais* でさまざまな愛を描いて見せた Marie de FRANCE は男女間の愛をどのようなものと捉えていたのであろうか。Philippe MÉNARD は Marie の *Lais* についてつぎのように述べている。

Tous les lais de Marie de France rapportent des histoires d'amour. (...) Qu'il s'agisse d'aventures faciles, de liaisons difficiles ou d'amours impossibles, les situations amoureuses sont toujours au premier plan. C'est autour d'elles que se noue l'action. Le héros du *Bisclavret* mis à part, les protagonistes du récit sont toujours des amants.<sup>3)</sup>

Ph. MÉNARD も指摘するごとく12の物語からなる *Lais* はすべて男女間の愛をテーマとして取り扱っているが、それらは未婚の男女間に発展する愛の物語と、男女のいずれかが別なる人物と婚姻関係にある者同士の間で発展する婚外恋愛を取り扱っている物語に大別しうる。当論集第28号においては *Lais* における愛の葛藤の記述について考察を行ったが<sup>4)</sup>、ここでは中世封建社会の文化的背景をも考慮しつつ、*Lais* において愛が具体的にどのような展開されるかを観察し、同時にそれぞれの物語において提示される愛がどのように関連しているか、作者は愛の問題についていかに考えていたのか、そこにはなんらかのメッセージが隠されているのかなどの点について考察してみることにする。

### 未婚の男女間に発展する愛

*Le Fresne* は Dol の領主 Gurun と、出生直後に捨てられ、修道院で養育され美しく成長した Fresne の愛を題材とするものであるが、Fresne は拾われたときに身に付けていた衣類や指輪から高貴な家系に属する人物であろうと推測しうるものの恋愛関係が発生した時点においては依然として氏素性が不明な女性である。従って中世の封建制のもとにおいては、たとえ兩人が誠実に愛し合っていたとしても、正式な婚姻関係は成立しがたいと考えられるし、このような内縁関係の継続にも極めて強い周囲の抵抗があったものと思える。事実 Gurun から領地を預かる臣下の騎士たちは領主に対して、Fresne との関係を清算し、対等の身分の別なる領主の一人娘 Codre を正式な妻とするよう進言し、もし自分たちの願いが聞き入れられない場合には主従の関係を解消したいと迫る。このような家臣たちの強硬な態度に Gurun は抗することができず、ついに彼らの意を汲んで Codre との結婚を承諾する。

Soventefeiz a lui parlerent / Que une gentil femme espusast / E de cele se delivrast; / Lié sereient s'il eüst heir, / Quë après lui puïst avoir / Sa terë e sun heritage; / Trop i avreient grant damage, / Si il laissast pur sa suinant / Que de espuse n'eüst enfant; / Jamés pur seinur nel tendrunt / Ne volenters nel

servirunt, / Si il ne fait lur volenté. / Le chevalers ad graanté / Que en lur  
cunseil femme prendra; (*Le Fresne*, vv. 316-329)

結婚はなによりも家門の繁栄を図るための手段であって、当人同士の愛情は重要な問題ではない当時の状況が上記の引用からも容易に察せられよう。このような事情については Pierre-Yves BADEL もつぎのように指摘している。

le mariage est une affaire subordonnée aux intérêts du lignage ou du seigneur qui ne laissent pas se marier à leur guise une orpheline ou une veuve, car le sort d'un fief est attaché à un mariage.<sup>5)</sup>

Gurun の臣下たちは、領主が広大な領地の相続が見込まれる上流貴族の娘を娶ってくれることで、やがては自分たちもその恩恵に浴することが期待できるのである。封建時代の主従関係は生涯にわたって主君と臣下を拘束するものであるから、臣下は主君を助けなければならないが、主君も臣下のために一定の義務を果たさなければならない。従って臣下の利害を無視した領主の内縁関係に関して異議を唱えることは臣下の側の当然の権利であったようだ。

L'hommage unit les deux hommes pour la vie, jusqu'au jour où la mort d'un des deux partenaires fait cesser le contrat. Si le contrat n'est pas respecté, il y a "félonie". Le vassal peut inversement "desfier" son seigneur indigne, lui retirer sa foi.<sup>6)</sup>

Gurun が Codre を妻に迎えることを知っても Fresne の態度はまったく変わらず、以前同様に Gurun や家臣たちに仕える。そしてこの姿に人々は心を痛める。

Quant ele sot kë il la prist, / Unques peiur semblant ne fist: / Sun seignur sert  
mut bonement / E honure tute sa gent. / Li chevaler de la meisun / E li vadlet  
e li garçun / Merveillus dol pur li feseient / De ceo ke perdre la deveient. (*Le  
Fresne*, vv. 351-358)

婚礼の儀が執り行われた日にも Fresne は健気に新妻にも仕え、侍従たちに指示を与えて新郎新婦の寝台を準備させるが、偶然にも Fresne と Codre が

双子の姉妹であることが判明し、急遽この結婚は解消、Gurun は Fresne を正妻とすることで物語は幸福な結末を迎える。Le Fresne に見られるような女性の犠牲的あるいは献身的な愛をテーマとする物語はスコットランド民話 Fair Annie を初め欧州各地に多数存在するが、それを文学の中に取り込んだのは Marie が最初のものであり、後に登場する BOCCACCIO の Griseldis などはいずれも Marie の物語を下敷きに行っているとされる。

Le Fresne に続いて若い男女の純真な愛をテーマとする物語は Les Deus Amanz であろう。ノルマンディーの Pistre という町の王は妻に先立たれた悲しみを癒すために自分の一人娘をこよなく愛し、有力な諸侯たちからの結婚の申し入れに対しても耳を貸さず、誰にも娘を嫁がせようとはしなかった。しかし父親としてのこうした生き方は中世においても批判の対象となったようであり、臣下の者たちでさえこの点に関しては王を非難している。

Plusurs a mal li aturnerent, / Li suen meïsmo le blamerent. ( Les Deus Amanz, vv. 25-26 )

娘の結婚に対して消極的な態度をとる領主は Eliduc にも登場するが、Eliduc の領主の場合は適齢期の娘への結婚の申し込みを拒絶したために、相手方から戦いを仕掛けられ領地を荒らされ、城を包囲されて窮地に陥るのである。封建領主にとって結婚は一族の命運にかかわる重大な問題であることは前述したとおりであるが、これが戦争の原因にもなりうる事実がつぎの引用文により確認することができよう。

Une fille ot a marier. / Pur ceo k'il ne la volt doner / A sun per, cil le guerriot,  
/ Tute sa tere si gastot. / En un chastel l'aveit enclos; ( Eliduc, vv. 95-99 )

Les Deus Amanz に登場する王の娘は高貴で美しい青年と誠実に愛し合っていたが、彼らの恋は勿論 2 人だけの秘密であった。

Ensemble parlerent sovent / E s'entr'amerent lëaument / E celerent a lur poeir, / Que hum nes puïst aparceveir. ( Les Deus Amanz, vv. 63-66 )

他方、王は人々の非難や王女への求婚の煩わしさから解放されるために一計を案じ、町を見下ろす小高い山の頂上まで休まずに娘を担いで登ること

のできる者に娘を授けるとの布告を出す。多くの者が耐久力を要するその力技に挑戦するとも成功する者は誰もいない。恋人が非力であることを承知の王女は、Salerneに住み医術や薬草の知識が豊富なある身内の夫人のところに彼を紹介し、愛する青年の体質改善を試みる。努力の甲斐あって見事に逞しくなった彼は疲労困憊しようとも飲めば直ちに力が甦る特効薬の飲料まで携えて帰郷する。彼は晴れて恋人を娶るべく力技への挑戦を王に申し出る。娘は絶食して体重の減量に努め試技の日に備える。指定された日、大勢が見守るなか若者は恋人を担いで順調に山頂目指して進んで行く。中腹で恋人が明らかに疲労していることを見て取った王女はしきりに特効薬の服用を勧めるが若者はこれを聞き入れようとしない。無理をして山頂まで王女を担ぎ上げたが、そこで彼は力尽きて絶命する。

Sovent li prie la meschine: / 'Ami, bevez vostre meschine!' / Ja ne la volt oïr ne creire; / A grant anguisse od tut li eire. / Sur le munt vint, tant se greva, / Ileoc cheï, puis ne leva; / Li quors del ventre s'en parti. ( *Les Deus Amanz*, vv. 199-205 )

恋人が息絶えたことを知った娘は苦しみのあまり自らもその傍らで死んで行く。娘を溺愛する父親の過剰な父性愛と節度を欠いた若者の思慮のなさが招いた結果がこの *Les Deus Amanz* という悲劇であろうか。

Arthur 王伝説を題材に物語が展開する *Lanval* は、騎士と妖精の恋が中心的なテーマとなる点においては他の物語とは幾分異なった様相を呈すると言えよう。Arthur 王の宮廷に仕える *Lanval* は他国の騎士で経済的にも精神的にも不遇な存在であるが、偶然ある絶世の美女と遭遇し求愛される。彼女が巨万の富とともに超自然的能力をも有する妖精であることはいずれ明らかになるのであるが、突然舞い込んできた幸運に有頂天となった *Lanval* は妖精との密会を重ねるのである。*Lanval* が望めばいつでも恋人との面会がかなう。そのために彼に課せられたる条件はただひとつ、2人の関係は絶対に口外してはならないということである。しかし彼は王妃の誘惑を拒絶するためにこの禁忌を破り、自分は誰よりも美しい女性と相思相愛の仲で、恋人に仕える侍女でさえ容貌、礼節、心根などいづれにおいて

も王妃を凌駕しているなどと心ならずも発言し失恋にいたる。

Mes jo aim, e si sui amis / Cele ke deit aver le pris / Sur tutes celes que jeo  
sai./ E une chose vus dirai, / Bien le sachez a descouvert: / Une de celes ke la  
sert, / Tute la plus povre meschine, / Vaut meuz de vus, dame reïne, / De  
cors, de vis e de beauté, / D'enseignement e de bunté. ( *Lanval*, vv. 293-302 )

Lanval は恋人との密会が不可能になったばかりか、王妃を侮辱した罪状で訴えられ法廷で窮地に陥る。彼の後悔および苦悩の激しさは計り知れないほどのものであるが、ここまで彼を追い詰めた原因はやはり彼自身の節度のなさであろう。人前で恋の自慢をするなどといった行為は礼節をわきまえるべき宮廷人としてはあるまじき言動なのであるか。宮廷風恋愛における秘密の厳守は鉄則であり、これに反するような恋は長続きしないことは明白である。

André le Chapelain en fait la treizième de ses *regulae amoris* : *Amor raro consuevit durare vulgatus* "L'amour peut rarement durer quand il est divulgué ". On comprend aisément qu'un amour illicite ne puisse vivre que dans le secret.<sup>7)</sup>

Lanval の裁判が進行するなか、いよいよ判決が下されようとするとき法廷に白馬に乗った妖精が現れ、恋人の潔白を証明し彼は釈放される。物語は表面的には幸福な結末を迎えるようではあるが、救出された Lanval は妖精とともに妖精の国 Avalun に馬で去って行くのである。すなわち彼は死の世界において初めて幸福を見出すことになるのだ。

Quant la pucele ist fors a l'us, / Sur le palefrei detriers li / De plain eslais  
Lanval sailli. / Od li s'en vait en Avalun, / Ceo nus recuntent li Bretun, / En  
un isle que mut est beaus; / La fu ravi li dameiseaus. ( *Lanval*, vv. 638-644 )

P.-Y. BADEL は *Lanval* の裁判が「異界」による人間社会の裁きであると述べている。すなわち人間社会が未知のものに、より美しくより正しい世界に心を開けるかが問われているのであるとの解釈であろう<sup>8)</sup>。この問いかけに対する答は、妖精と Lanval の Avalun への旅立ちにより否定的であることが示されていると言えよう。

高貴で勇猛な騎士 Milun と貴族の娘の恋愛がテーマの *Milun* は互いに白鳥に恋文を届けさせるといった突飛とも思える方法で長期間の交際が継続する物語である。愛の芽生えは多くの宮廷風恋愛物語に見られるごとく極めて単純である。すなわち優雅で勇ましく勲功の誉れ高い Milun の噂を耳にした娘が相手に使者を派遣し、恋愛の意思表示をするといったものである。このように世間の評判を聞いただけで会ってもいない人物に愛情を抱くといったことが男女ともに中世では頻繁にあったようだ。Milun と娘の関係は2人だけの秘密で、彼らは密会を重ねるうちに娘の妊娠に気づく。彼女は恋人を呼んで身の不始末を嘆き、悲しみを訴える。

Quant aparceit que ele est enceinte, / Milun manda, si fist sa pleinte. / Dist li  
cument est avenu:/ S'onur e sun bien ad perdu, / Quant de tel fet s'est  
entremise; / De li ert faite grant justise: / A gleive serat turmentee, / U  
vendue en autre cuntree; / Ceo fu custume as anciens, / Issi teneient en cel  
tens. (*Milun*, vv. 55-64)

未婚女性が身重になった場合、その名誉は失墜し、体罰を加えられたり他国に売られるといった制裁が待っていたことが上の文より窺える。勿論「これは昔の人々の慣わしであった」といった記述から、この物語が書かれた12世紀後半でも状況は同じであったとは言えないであろうが、中世は一般にこの種の不行跡に関しては非常に厳しい社会であったと推測しうる。こっそり男児を出産した娘は、すぐに子供を姉のところに送り届けて養育を依頼する。娘の父親は彼女をある有力な貴族に嫁がせるが、娘は恋人を愛惜するとともに過去の過ちが夫に知れるのではないかと思ひ悩むのである。

Quant ele sot cele aventure, / Mut est dolente a demesure / E suvent regrette  
Milun. / Kar mut dute la mesprisun / De ceo que ele ot eü enfant; / Il le savra  
demeintenant. / 'Lasse,' fet ele, 'quei ferai? / Avrai seigneur? Cum le prendrai?  
/ Ja ne sui jeo mie pucele; / A tuz jurs mes serai ancele. (*Milun*, vv. 129-138)

恋人の結婚に Milun は落胆するが、ここから伝書鳩ならぬ白鳥による文通が始まり、それが20年も続くことになる。この物語の結末は少々あっけな

い。叔母に育てられた恋人たちの子供が勇壮な騎士に成長し、Munt Seint Michel での馬上試合で図らずも父親の Milun と対戦し、互いに親子であることが判明。最後は息子が両親を正式に結婚させるのであるが、彼女の夫もその直前に死ぬことになるので、Yonec のような息子による義父の殺害での終幕といった設定は回避されている。

### 婚外恋愛

Marie は多くの婚外恋愛を物語のテーマにしている。「12世紀の文学は、南仏はもとより、北仏においても、結婚の意義の否定、婚外恋愛の積極的肯定の歴史であった」<sup>9)</sup>と言われるが、Marie の場合もこのような愛の形態に対する罪の意識は希薄であるようだ。

Les liaisons amoureuses hors mariage lui paraissent parfaitement naturelles.  
L'idée qu'en pareil cas les amants puissent être coupables ne semble pas lui venir à l'esprit.<sup>10)</sup>

Lais における婚外恋愛は *Eliduc* を除きすべて既婚女性と未婚男性の間に展開されるものである。これらのなかで *Guigemar* と *Yonec* には、老年の嫉妬深い夫によって城中に閉じ込められ、厳しく監視され精神的に苦しむ若い奥方が主人公であるといった類似の状況設定が認められる。

Li sires ki la mainteneit / Mult fu velz humme e femme aveit, / Une dame de haut parage, / Franche, curteise, bele e sage; / Gelus esteit a desmesure;  
( *Guigemar*, vv. 209-213 )

Cist viel gelus, de quei se crient, / Quë en si grant prisun me tient? / Mut par est fous e esbaiz, / Il crient tuz jurs estre trahiz. ( *Yonec*, vv. 71-74 )

これら2つの物語に見られる年老いた夫と若い妻といった組み合わせは中世の騎士階級社会を反映するものとして興味深い。世襲財産の目減りを嫌う領主たちは息子たちの結婚には消極的であるため、特に次男や三男ともなると相手を見つけることがいっそう困難になる。それは適齢期の娘を持つ父親たちが、娘の婿として土地なしの若者よりも老年であろうとも金持ちのほうを望んだからである。このような状況を P.-Y. BADEL もつぎのよ

うに指摘する。

Mais les puînés, que peuvent-ils espérer? des miettes de l'héritage familial peut-être, et leurs pères n'envisagent pas de leur procurer des épouses, car les marier, ce serait amputer le patrimoine. Il y a pis: ces bacheliers trouvent dans la génération antérieure des rivaux auprès des filles susceptibles de se marier, car pour elles, leurs pères préfèrent des veufs âgés mais riches à des jeunes sans terre!<sup>11)</sup>

12世紀以来、領主の奥方たちは城中において一定の快適な生活区間を保証されてはいたようだが、未だその日常は男性の監視下に置かれていたようで、これらの物語における幽閉同然の状況は異様と言わざるをえないが、一般的には女性が人前に出ることができるのは祝宴や礼拝など特別な機会に限られていたようである<sup>12)</sup>。

*Guigemar* は物語の発端において女性に関心のない一種の欠陥を持った若者として紹介されているが、狩猟で射止めた牝鹿の予言どおり、肉体的精神的苦痛を癒してくれる美しい奥方と宿命的な恋に落ちる。しかし他国の人間を愛することに対する女性の側の警戒心を恐れて彼は率直に心情を伝えることを躊躇する。

Sil ne l'osot n'ient requere; / Pur ceo qu'il ert d'estrage tere, / Aveit poür, s'il li mustrast, / Que el l'en haïst e esloinast. ( *Guigemar*, vv. 477-480 )

このように他国の男性を恋人にすることへの不安や警戒の念は *Eliduc* にも認められるが、これは相手の家系や逗留の期間についての確信のなさが原因であろうと考えられる。

'Lasse, cum est mis quors suspris / Pur un humme de autre païs! / Ne sai s'il est de haute gent, / Si s'en irat hastivement; / Jeo remeindraï cume dolente. ( *Eliduc*, vv. 387-391 )

また *Guigemar* と *Yonec* には、恋する二人の関係が第三者によって見破られ、嫉妬深い夫に密告されることによって破綻するといった共通の展開が認められる。

Cel jur furent aparceü, / Discovert, trové e veü / D'un chamberlenc mal

veisié / Que si sires l'out enveié; / A la dame voleit parler, / Ne pout dedenz  
la chambre entrer;/ Par une fenestre les vit; / Veit a sun seigneur, si lui dit.  
( *Guigemar*, vv. 577-584 )

Cele le vit, si l'esgarda, / Coment il vient e il ala; / De ceo ot ele grant poür /  
Que hume le vit e pus ostur. / Quant li sires fu repeirez, / Que gueres n'esteit  
esluignez, / Cele li ad dit e mustré / Del chevalier la verité; / E il en est  
forment pensifs. ( *Yonec*, vv. 275-283 )

*Guigemar* は追放され故郷に帰還するが、恋人を忘れられずに勧められる結婚はすべて断り続ける。他方、奥方も幽閉されていた城を脱出、船でブルターニュに到着し *Meriaduc* と名乗る領主の城に身を落ち着けるが、領主の愛を拒みつつ *Guigemar* への思いを断ち切ることができずに悲しみに沈む日々を過ごす。このように2人は互いに耐えがたい苦しみを体験するが、最後には *Guigemar* が *Meriaduc* の城を攻略し恋人と結ばれる。2人の愛が幸福な結末を迎えることになるのも、最初に奥方の侍女が *Guigemar* につきぎのように言ったとおり、終始誠実に相手を慕う彼らの気持ちに揺るぎがなかったからであろうか。

Amer poëz en iteu guise / Que bien ert vostre amur assise. / Ki ma dame  
vodreit amer / Mut devreit bien de li penser; / Cest' amur sereit covenable, /  
Si vus amdui fussez estable. ( *Guigemar*, vv. 447-452 )

*Yonec* においては、奥方が望めばいつでも相手の超自然的能力により逢瀬が可能になるといった設定が *Lanval* とも類似するが、奥方は恋人 *Muldumarec* の節度を守るようにとの忠告にもかかわらず、密会を重ねて現場を見られ密告される。

Mes tele mesure esgardez / Que nus ne seium encumbrez: / Ceste vielle nus  
traïra, / E nuit e jur nus gaitera. / Ele parcevra nostre amur, / Sil cuntera a sun  
seigneur. / Si ceo avient cum jeo vus di, / E nus serum issi trahi, / Ne m'en  
puis mie departir, / Que mei nen estuce murir. ( *Yonec*, vv. 201-210 )

*Muldumarec* の予告は的中し、彼は鷹に変身して恋人に会いにくる進入路の窓に仕掛けられた鉄串に刺さり命を落とすことになる。しかし物語の結末

では、Muldumarec と奥方の間に生まれた子供が立派な騎士に成長し、実父の剣で義父に対して両親の恨みを晴らす。

*Equitan* と *Bisclavret* はいずれも妻による夫の裏切りといった共通のテーマを持つ。*Equitan* は高貴で優雅な王で人々から敬愛されてはいたが、狩猟や色恋が何よりも好きで遊興を優先するタイプの人物である。この王が臣下である家令の容姿端麗なる妻に思いを寄せる。しかし臣下の妻を愛人にするのは主従の信義に反する行為であり、*Equitan* もさすがに良心の呵責に苛まれるのであるが、,

Jeo quit que mei l'estuet amer; / E si jo l'aim, jeo ferai mal: / Ceo est la  
femme al seneschal. / Garder li dei amur e fei, / Si cum jeo voil k'il face a  
mei. (*Equitan*, vv. 70-74)

家令がかくも美しい妻をひとり占めすべきではないとの利己的な理屈で自らを納得させた王は機会を見つけて求愛に及ぶ。しかし彼女は身分の違いを理由に最初はこれを断る。たとえ貧しくとも誠実なる人物の愛は君子の愛に勝るといのが彼女の言い分である。

Amur n'est pruz se n'est egals. / Meuz vaut un povres hum lëals, / Si en sei ad  
sen e valur, / E greinur joie est de s'amur / Quë il n'est de prince u de rei, /  
Quant il n'ad lëauté en sei. (*Equitan*, vv.137-142)

しかし *Equitan* は簡単には引き下がらない。彼は家令の妻に対して自分を王ではなく家来や召使と見なすよう懇願し、ついに相手の愛を獲得する。その後、王は長期間にわたり家臣の妻を愛人とし他の女性との結婚を望まなかったことで、取り巻き連はそのことで王を激しく非難するが、このような展開は *Le Fresne* とも相通ずるものがある。結末では夫を殺して王妃の座を手に入れようと画策した家令の妻の裏切り行為が破綻をきたし、恋人同士が熱湯の浴槽で 絶命する。作者は他人を不幸に陥れようとするれば、やがては自らに不幸が訪れるという言葉でこの悲劇的物語を締めくくっている。

リカントロピー（狼への変身）は中世ではかなり流布していた民間伝承であるが、*Bisclavret* もこれを題材として物語が進行する。主人公はブル

ターニュに住む立派な騎士で高貴な妻を娶り、二人は互いに愛し合っていたが、妻の唯一の気がかりは夫が週に3日間姿を消すことであった。

Sire, jeo sui en tel effrei / Les jurs quant vus partez de mei, / El quor en ai  
mut grant dolor / E de vus perdre tel pouër, / Si jeo n'en ai hastif cunfort, /  
Bien tost en puis aver la mort. / Kar me dites u vus alez, / U vus estes, u  
conversez! / Mun escient que vus amez, / E si si est, vus meserrez.

(*Bisclavret*, vv. 43-52)

失踪の秘密を探ろうとする妻の巧みな嘆願や詰問に夫は人狼に変身し森で過ごすと告白する。妻は更に質問を続け、変身に際しての着衣の有無、脱衣後に衣服を置いておく場所などを聞き出すことに成功するが、作者はこの場面の着想を旧約聖書サムソンとデリラの物語（士師記13章～16章）から得ていることは明白である。イスラエルの伝説上の英雄サムソンが敵方のペリシテに内通する愛人デリラの再三の懇願により、ついにその力の秘密を明かしたため、敵の手に落ちる話は中世では周知の物語であろう。

夫の野獣への変身といった事実には驚愕した妻は以前から自分に思いを寄せていた騎士を呼び寄せ、望みをかなえさせることと交換に、夫が失踪中にその衣服を取りに行かせて人間の姿に戻れないようにする。物語は後半において、人狼が自分を裏切った妻と彼女が新たに夫とした騎士に復讐を果たし、再び元の騎士の姿を取り戻す展開になる。人狼に鼻を噛みとられた妻は再婚相手とともに国外に追放されるが、更にこの夫婦には過酷な運命が待ち受けている。すなわちその一族に生まれてくる多くの女たちには鼻がないといった刑罰が末代までも科せられるのである。

*Chaitivel* は1人の貴婦人が同時に4人の騎士を愛するという、現代から見れば少なからず異様な男女関係を取り扱うものであるが、女性の自己中心的な愛をテーマとする点において *Bisclavret* と相通じるものがある。主人公の夫と称する人物は登場しないし、それに関する記述は認められないことから、かなり裕福な寡婦であるとの設定も推測しうるが、物語の状況から既婚者と想定するほうが妥当であろう。彼女は自分に愛を捧げる4人の騎士たちのなかで誰を愛すべきか熟慮を重ねる。しかし1人を選ぶこと

により他の3人を失うことが承服できず、各人に自分が最も愛されていると思わせるような行動をとる。

En respit mist e en purpens / Pur saver e pur demander / Li queils sereit meuz  
a amer. / Tant furent tuz de grant valor, / Ne pot eslire le meillur. / Ne volt les  
treis perdre pur l'un: / Bel semblant feseit a chescun, / Ses drüeries lur  
donout, / Ses messages lur enveiot: ( *Chaitivel*, vv. 50-58 )

騎士たちが集う試合の折には、4人はそれぞれに我こそは真の恋人である  
と思ひ込み、婦人から送られた愛の証の品々を身に付け、彼女の名を叫ん  
で戦う。

A l'assembler des chevaliers / Voleit chescun estre primers / De bien fere, si il  
peüst, / Pur ceo que a la dame pleüst. / Tuz la teneient pur amie, / Tuz  
portouent sa drüerie, / Anel u mance u gumfanun, / E chescun escriot sun  
nun. ( *Chaitivel*, vv. 63-70 )

婦人と4人の騎士のこのような交際は暫時継続するが、Nantesの城下で開  
催された馬上試合で4人のうち3人が落命し、残る1人も瀕死の重傷を負  
う。この不幸な出来事に婦人は悲嘆に暮れ、3人を手篤く葬るとともに重  
傷の騎士には医師の治療を受けさせる。しかしこれで彼女や生き残った騎  
士の苦しみが終わることにはならないのである。

*Laüstic* と *Chevrefoil* は愛し合う2人が互いに思い出を胸に秘めて別離の  
苦しみに耐える展開が共通している。*Seint Mallo* 地方在住のある独身貴族  
が壁を隔てて隣に住む騎士の妻を恋する物語が *Laüstic* である。2人は秘密  
裏に慎重に愛を育む。

La femme sun veisin ama; / Tant la requist, tant la preia / E tant par ot en lui  
grant bien / Que ele l'ama sur tute rien, / Tant pur le bien quë ele oï, / Tant  
pur ceo qu'il iert pres de li. / Sagement e bien s'entr'amerent; / Mut se  
covrirent e garderent / Qu'il ne feussent aparceüz / Ne desturbez ne  
mescreüz. ( *Laüstic*, vv. 23-32 )

恋人たちの密会は各々が住む館の窓から庭を隔てて行われ、奥方が夜に窓  
辺に立つ口実に使われるのが物語のタイトルともなっている夜鳴き鶯なの

である。夜に妻が寝室を離れる理由が鶯の鳴き声を聞くためであるとの言い訳に激怒した夫は庭に網やとりもちを仕掛けてこの小鳥を捕らえ、それを夫人の見ている前で殺し、死骸を彼女に投げつけるといった蛮行に及ぶ。恋人との逢瀬が不可能になった夫人は深く悲しむ。

'Lasse,' fet ele, 'mal m'estait! / Ne purrai mes la nuit lever / Ne aler a la fenestre ester, / U jeo suil mun ami veer. ( *Laüstic*, vv. 126-129 )

彼女は金糸で刺繍をした絹の布で死んだ鶯を包み、それを恋人のところに届けさせ、ことの次第を伝える。相手の騎士はこの不幸な出来事に心を痛めるが、宝石を散りばめた純金の小箱に小鳥の亡骸を密封し、以後それを手放すことはなかった。

*Chevrefoil* はトリスタン伝説に由来する物語である。コーンウォール王 Mark は王妃を慕う甥の Tristram に立腹し彼を国外に追放する。

Li reis Marks esteit curucié, / Vers Tristram sun nevuz irié; / De sa tere le cuncea / Pur la reine qu'il ama. ( *Chevrefoil*, vv. 11-14 )

Tristram は故郷に戻るが、再度王妃の住むコーンウォールに引き返し、森に身を潜め情報収集に努める。彼は王が聖霊降臨祭に Tintagel で祝宴を催すことを知り、そこへ向かう王妃の一行を森で待ち受け、暫しの逢瀬を楽しむ。別れに際し恋人たちは悲しみに暮れるが、Tristram はウェールズに帰ってひたすら王の赦しを待つことになる。

Atant s'en part, sun ami lait; / Mes quant ceo vient al desevrer, / Dunc comencerent a plurer. / Tristram a Wales s'en rala, / Tant que sis uncles le manda. ( *Chevrefoil*, vv. 102-106 )

*Lais* に収められている物語12編のなかで最長のもが *Eliduc* であり、登場人物も多彩で物語もやや複雑に展開する。主人公の騎士 Eliduc は領主の信望も篤く高貴な妻 Guildelüec とともに幸せに暮らしていたが、いわれのない中傷が原因で領主の寵愛を失い、海を渡って Excestre 近辺の王に傭兵として仕えることになる。この王には Guilliadun という美しい娘がいたが、彼女と Eliduc の間に愛が芽生える。彼は故国に残してきた妻とは終生貞節を守る誓約を取り交わしているために苦悩する。

Mut se teneit a maubailli; / Kar a sa femme aveit premis, / Ainz qu'il turnast  
de sun país, / Quë il n'amereit si li nun. / Ore est sis quors en grant prisun. /  
Sa læauté voleit garder; / Mes ne s'en peot niënt oster / Quë il nen eimt la  
dameisele, / Guilliadun, que tant fu bele, / De li veer e de parler/ E de baisier  
e de acoler; ( *Eliduc*, vv. 462-472 )

Eliduc は自分が妻帯者であることを王女には告げていないし、妻との誓約に反する彼の愛はこの時点においては純粋な愛とは言いがたい。しかし中世の物語における恋愛発生のメカニズムには、当人同士の意思に加えて愛の神の行為が関与していることは頻繁に指摘される場所である<sup>13)</sup>。愛の神の放つ矢に射られた者はたちまち病に罹ったような症状を呈し、これを克服することが極めて困難な状態に陥るのは *Equitan* においても同様である。ところが作者は Eliduc のこのような不純な愛に対しては比較的寛容であり、*Equitan* においては恋人たちを死でもって断罪したのはなぜであろうか。それは物語の結末において明らかにされる。Eliduc と Guilliadun の関係を知った妻 Guildelüec は夫が王女を正式な妻とすることを認め、自らは修道女となって神の教えに帰依する道を選択する。

Quant la dame vit lur semblant, / Sun seigneur ad a reisun mis; / Cungé li ad  
rové e quis / Que ele puisse de lui partir, / Nunein volt estre, Deu servir; / De  
sa tere li doint partie, / U ele face une abeïe; / Cele prenge qu'il eime tant, /  
Kar n'est pas bien nē avenant / De deus espuses meintenir, / Ne la lei nel deit  
cunsentir. ( *Eliduc*, vv. 1120-1130 )

すなわち作者は神への愛と人間的な世俗の愛の融合をこの物語において実現しようとしたのであろう。Eliduc は領地を分割して Guildelüec に与え、僧院を建立させる。そして彼女はそこで30人の尼僧たちとともに信仰生活に入る。Eliduc と Guilliadun の婚礼は厳かに執り行われ、2人は強い愛の絆で結ばれ長くともに暮らす。後年 Eliduc は Guilliadun を元の妻に託し、自らは財を投じて城館に隣接して御堂を建立し、そこで信仰の篤い家臣たちとともに僧門に入る。3人は誠実に神を愛すべく努め、神の恵みにより大往生を遂げるといった、極めて宗教的色彩が濃厚な結末である。

Mut se pena chescun pur sei / De Deu amer par bone fei / E mut par firent  
bele fin, / La merci Deu, le veir devin. (*Eliduc*, vv. 1177-1180)

### *Lais*における愛の構造

これまで見てきたように、*Lais*には実にさまざまなタイプの愛が認められる。これをなんらかの定式のもとに整理することはまずもって不可能と言わざるをえない。この点に関しては既に P.-Y. BADEL も指摘するところである。

Enfin l'esprit de ces oeuvres n'est pas un, elles se ressentent d'avoir été écrites à l'époque courtoise, mais les images qu'elles donnent de l'amour sont assez diverses.<sup>14)</sup>

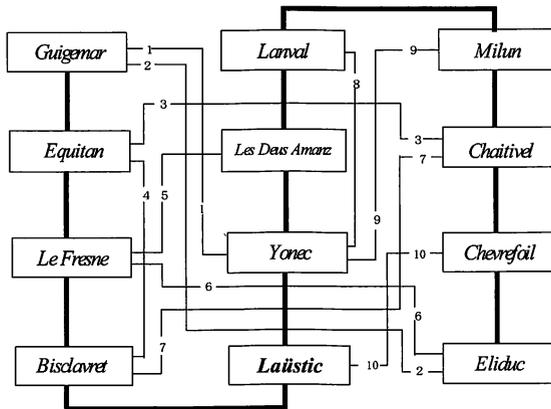
しかしどのタイプの愛にも必ず苦しみが伴う。Marie が愛に伴う苦悩を一貫して強調している事実は多くの研究者が指摘するところであり、作品を一読すればそれは容易に理解することができよう。

Chez Marie le bonheur est fugace. Ce qui prédomine, c'est la tristesse, l'inquiétude, la souffrance, bref les heures grises et noires de la vie affective.<sup>15)</sup>

Throughout the *Lais*, Marie deals with the nature of love, stressing always the suffering which accompanies it.<sup>16)</sup>

更に *Lais* を構成する12編の物語を仔細に検討すると、愛に関係するテーマや展開が複数の物語の間において相互に関連付けられていることが判明する。たとえば *Guigemar* と *Yonec* は老年の嫉妬深い夫に苦しむ奥方が若い騎士を恋人にし、密会現場を目撃されて夫に密告されるといった展開が共通する。また *Yonec* と *Lanval* は愛する相手が超自然の能力を有し、望めばいつでも密会がかなう。更に *Equitan* と *Bisclavret* には妻の裏切りと不純な愛に下される天罰、*Le Fresne* と *Eliduc* には見返りを期待しない女性の自己犠牲的な愛、*Laüstic* と *Chevrefoil* には思い出を胸に秘め別離に耐える愛が認められるなど、作者は人間を苦しめる多様な愛の情念を描きながらも、それらをさまざまなヴァリエーションのもとに微妙に関連させながら複数

の物語のなかに提示している様子が窺える。すなわち *Lais* は以下に図示するごとく、苦悩という一本の太い縦糸に貫かれていると同時に、各々の物語はまた別なる物語とも愛に関連する要素、すなわち横糸によっても繋がっていて、一種の愛と苦悩の綾織のような構造を有する作品であると解釈することも可能であろう。



太線：愛に伴う苦悩

- |                     |               |
|---------------------|---------------|
| 1：老年の嫉妬深い夫に苦しむ妻の婚外愛 | 6：女性の自己犠牲的な愛  |
| 2：他国の騎士を慕う愛         | 7：女性の自己中心的な愛  |
| 3：肉体的快楽を追及する愛       | 8：超自然的能力による愛  |
| 4：妻の裏切りによる婚外愛       | 9：息子により合一される愛 |
| 5：誠実純真な愛            | 10：別離に耐える愛    |

## おわりに

本稿では Marie de FRANCE の *Lais* が苦しみを伴う愛の多様性を描いた作品であることを物語の分析を通じて確認したが、登場する恋人たちはただ受動的に情念の苦しみを甘受するのではなく、積極的にそれから解放されるべく努力する。また彼らの抱く恋情の道徳的観点における善悪を別にして、難局打開のため能動的に行動する女性が多く物語に顕著に認められる。*Equitan* や *Bisclavret* では妻が夫の裏切りを恋人に唆し、法廷で苦境に

立たされた Lanval を最後に救出するのも、最初に彼に愛を求めた美女である。また *Les Deus Amanz* や *Milun* においても何らかの形で女性が愛の進展に積極的に関与していると言える。これは作品が成立した12世紀後半といたった時代が、封建制度の基礎が固まり、宮廷生活が豊かになるとともに女性の地位が向上してきた時期であったこととも無関係ではないであろう。

それでは作者はどのような愛を理想の愛と見なすのであろうか。この疑問に対する解答は作品をいかに解釈するかによりさまざまに変化するであろう。結末において 恋人たちが幸福な愛を見出す物語は *Guigemar*, *Le Fresne*, *Milun*, *Eliduc* であろうが、幸福なる愛が理想の愛であると定義できるほど単純なものでもないように思える。逆に不幸な結末を迎える愛は *Equitan*, *Bisclavret*, *Les Deus Amanz*, *Laüstic*, *Chaitivel*, *Chevrefoil* に見られるが、これらの愛を作者はすべて否定しているとも断定できない。*Lanval* と *Yonec* は表面的にはハッピーエンドの物語であるが、恋人たちの愛が現世において最終的に成就されたとは言えない。12世紀は結婚の意義を否定し婚外恋愛を積極的に肯定する時代であったことは既に述べたが、Marie が多くの婚外恋愛を取り上げるなかで、これらをすべて称揚し、結婚を全面的に否定しているのかと言えば、そうでもないであろう。いくつかの物語は恋人たちの結婚・合一により円満に終止することも事実である。結局作者は理想の愛がなんたるかに対して確たる解答は与えていないように思える。作者のこのような姿勢は自身がこの物語集の冒頭においてプリスキアヌスからの引用であると断りながらも「昔人は書物に曖昧模糊たる考えを盛り込むのが常であった。これは後世の人々が自らの知識を付け加えて、その書を豊かなものとする事への計らいである」<sup>17)</sup>と述べていることとも符合する事実であろうか。「*Lais* はなにかを証明したり論証するために編まれたのではない。それは求め合い愛し合う男女を大胆さを抑えながら、一定の慎み深さをもって描いたものである」<sup>18)</sup>と Ph. MÉNARD は述べている。MÉNARD はこの作品を題材として愛の道徳論を展開することは作者の意図を取り違えることになるとの立場に立っているようであるが、作中では節度を省みない愛がしばしば破綻をきたす事例が認められることから、

互いに常に節度を守りつつ相手の立場にも十分に配慮した愛が漠然とではあるが推奨されていると結論づけても、作品の解釈を大きく逸脱するものではないであろうと思える。

(本学教授)

#### 使用テキスト

Marie de FRANCE : *Lais*, edited by Alfred EWERT, Oxford, Basil Blackwell, 1963.

#### 註

- 1) cf. 新倉俊一著、『ヨーロッパ中世人の世界』, 筑摩書房, 1983, pp.129-130.
- 2) 新倉俊一著, *Ibid.*, p.145.
- 3) Philippe MÉNARD, *Les Lais de Marie de France, Contes d'amour et d'aventure du Moyen Age*, Presses Universitaires de France, Paris, 1979, p.100.
- 4) cf. 拙稿:「*Lais* における愛の葛藤の記述に関する一考察」, 『仏語仏文学』第28号, 関西大学フランス語フランス文学会, 平成13(2001)年2月, pp.1-13.
- 5) Pierre-Yves BADEL, *Introduction à la vie littéraire du Moyen Age*, Dunod, Paris, 1997, p.21.
- 6) P.- Y. BADEL, *Ibid.*, p.22.
- 7) Ph. MÉNARD, *op. cit.*, p.132.
- 8) cf. P.- Y. BADEL, *op. cit.*, pp.32-33.
- 9) cf. 新倉俊一著, *op. cit.*, p.17.
- 10) Ph. MÉNARD, *op. cit.*, p.140.
- 11) P.- Y. BADEL, *op. cit.*, p.105.
- 12) cf. Michel PIERRE, *Le Moyen Age*, Hachette, Paris, 1996, p.81.
- 13) cf. 拙稿: *op. cit.*, pp.7-10.
- 14) P.- Y. BADEL, *op. cit.*, p.204.
- 15) Ph. MÉNARD, *op. cit.*, p.115.
- 16) Emanuel J. MICKEL, Jr, *Marie de France*, Twayne Publishers, New York, 1974, pp.120-121.
- 17) Costume fu as anciens, / Ceo testimoine Preciens, / Es livres ke jadis feseient / Assez obscurement diseient / Pur ceus ki a venir esteient / E ki aprendre les deveient, / K'i peüssent gloser la lettre / E de lur sen le surplus mettre. (*Prologue*, vv, 9-16)
- 18) Ph. MÉNARD, *op. cit.*, p.149.